



稲畑廣太郎
廣太郎句集

俳句の未来

百花繚乱、伝統と不易、そして流行
が生み出す広く豊穡な現代俳句の次
代を担うべき俊英作家の精選新句集
叢書。——おひらきおひらき——

出版社◎定価：本体3,000円＋税

廣太郎句集

稻畑廣太郎

序

私の長男稲畑廣太郎が俳句を作るようになったのはホトトギス社に入社してから何年か経った頃である。しかしまだ小さい頃から私の実家である芦屋の高濱年尾の家の俳句会や、わが家での句会によく一緒にしていたので何となく俳句に親しみを抱いていたようである。

俳句を作るようになってからは前ホトトギス編集長の松尾緑富さんの指導を受け、又現在はホトトギス編集長という立場で仕事をしており多くの俳句に目を通すうちに俳句に対する目も肥え俳人として立つ決意をするようになったと思われる。先ずは恵まれた環境に育まれたと言ってもよいであろう。私と同様門前の小僧として俳句を作り、いつの間にか俳人廣太郎になったのである。

昭和三十三年五月二十日生まれ、廣太郎という名は曾祖父高濱虚子が命名した。三十三年虚子が芦屋の年尾居に泊った時に私は祖父に廣太郎を見せるために連れて行ったが、「お膝へいらっしやい」と手招きした曾祖父虚子の側に駆け寄って膝にどんと坐ったもので祖父は笑いながら「大人の相がある」と言ってくれた。人見知りをしない子であったが、そんなところが廣太郎の俳句に見られるナীবと骨太なところが廣太郎の俳句に見られる。

今廣太郎はホトトギスで課題句の選者を務めている。沢山の投句を頂き、得難い勉強をさせて頂いている。

この度花神社からのお誘いがあつて第一句集を出版する運びとなつた。まだ口に出して言ったことはないがホトトギスの課題句の選者をして行くということはただ俳句を選ぶということだけではいけないと私は思っている。選者たるもの、自分の作品をまとめて世に問い続けなければならない。

これまで自由に作ってきた俳句を先ず句集として大勢の方々に読んで頂くことが急務だと思う。それはまた自分の作ってきた俳句を自ら読み返す良い機会でもある。花神社からは良い時期に良いお話を頂いたと感謝している。作品にはまだ未熟なものもあるが、一歩々々自分の作品を確立していかねばならない時期であろう。

廣太郎は幼い頃から祖母や父親の影響を厚く受けてクラシック音楽に深い興味を持っていた。又自身もピアノを弾き、トランペットを吹き、指揮者を目指すという熱の入れ方であったが、そのことも彼の作品に大きく影響しているように思う。最近は何楽にも興味を持ち始めたようであるが格調高い俳句を目指しているようにも見える。

幸い坂井建さんを始めとする若手の勉強会「山菜萁会」の仲間に入れて頂いて勉強している。松尾緑富さん、吉村ひさ志さん、吉田小幸さんを始め、多くのホトトギス諸先輩のご指導を頂いているこ

とも本人にとって得難いことである。二十一世紀に向って本当の俳句の心を若い世代に伝えて行く一人として、無理なく謙譲の心を持って努力して行って欲しい。この句集が大勢の方々の目に触れお読み頂けることを心より願っている。

平成十一年十一月十八日

芦屋にて

稲畑 汀子

昭和五十七年～平成六年

一〇三句

一月

恵方より授かりし子の名を決めし

帰郷せぬ故郷よりの初電話

鞆置き子の悴みし手を握る

悴める手でエチュードは弾き難し

悴める手に鍵盤は重かりし

姉となる仕草にも慣れ春隣

二月

瑠璃色を教へし吾子に犬ふぐり

咲く程に景となりゆく庭の梅

アンダンテカンタービレの春時雨

三月

風吹いて一直線に椿落つ

西行忌習ひし古典懐かしき

一本の野梅に景ののみ込まれ

うつむきし椿に雨の重さあり

四月

桜見て遠き故郷人恋し

休日に仕事朝寝も許されず

花便聞くは故郷より早く

花冷に忌を修したる寺のあり

落花急吾子の姿を隠しをり

石 罅 玉 屋 根 を 越 す ま で 見 定 め し

石 罅 玉 壁 に 半 球 残 り た る

初 花 の 力 風 に も 負 け ま じ く

稜線は桜の色となつてゐし

シューマンにクライスラーに花に会ひ

持ち帰りゐしは吉野の華鬘草

花
人
に
忘
れ
ら
れ
た
る
傘
一
つ

五月

霞みてもホーエンザルツブルク城

ミラベルの藤庭園に佇みて

カラヤンの生家見つけもして立夏

吾子の着るネルの寝巻は祖母のもの

若葉目に祝ぎは心に焼きつけし

葉桜の耀きをもて祝ぎの座へ

雨もまた祭の色として参加

池の面を薰風少し動かして

遠景に尾根の万緑色淡く

郭公と聞こゆるまでの静寂かな

祖父に会ふごとく夏めく句碑に佇つ

烏賊火燃ゆ事に夜景の始まりし

六月

立葵霰残して咲きのぼる

尺蠖の這へば子の手の従ひぬ

語らるる花鳥諷詠涼しき目

梅雨晴間心一つに集ひ来し

梅雨空に東京タワー瘦せてをり

蠅を追ふ吾子の視線の定まらず

梅雨籠して家族皆揃ひけり

ジギタリス吾子の背丈に咲のぼる

七月

〇 L の 鬼 灯 市 の 帰 り ら し

雪 溪 の 見 え て よ り 道 始 ま り ぬ

滴りに四方より手の伸びて来し

瞬きをせし間に流れ星の消ゆ

八月

蝸が鳴きて六甲日暮れたる

不参詫びつつ亡き父の墓洗ふ

鵲が天にかかりてつる女逝き

流星を見付けるまでと夜を明かす

蝸の名乗るがごとく鳴きにけり

対岸の仕掛花火に人浮び

朝顔の宿題家族巻き込みて

九月

曾祖父の植ゑし竹林実を結ぶ

白露の日召されし父の形見かな

ダイエツトせよと夜食を禁じられ

秋の潮狭まり巨船棧橋に

初潮に舟の航跡歪みたる

戦争を知らぬ世代や露の我

慣れて来し目に満目の星月夜

船動き初め秋の海動き初む

洋上に確と秋めく風を見し

父も又早世の人 獺祭忌

直線といふとんぼうの世界あり

露の玉弾きし指に移りたる

十月

高原の空の広さに鳥渡る

語り継ぎ守り継がれて宗鑑忌

握られし手の思ひ出に年尾の忌

くつきりと見えし富士より秋の声

編隊を組み直しつゝ鳥渡る

東京に早や十二年秋の暮

百年の慶事とならむ年尾の忌

年尾忌や我の歩むも祖父の道

冬仕度今年は一人分増えて

プロ野球終りし日より冬仕度

杜氏の名も確かめ新酒買ひにけり

潮かぶるところの珊瑚草赤し

十一月

几董忌を修する寺も古りにけり

大綿の空に紛れし白さかな

少し雪少し谷川岳の彩

岩肌の色とし雪の少しあり

黄葉より谷川岳の始まりぬ

故郷の冬の大会かはきりに

転びても先づ袴着を気にしたる

ひつそりと神を迎へし過疎の村

山茶花の活けし端より崩れたる

弟も学びし冬の東大に

キャンパスも道も落葉の色となる

寄りし鴨離れし鴨も波まかせ

サントリーホール出づれば小夜時雨

十二月

塵落ちて雨氷の色に紛れけり

赤ばかり好みし吾娘のセーターよ

妻編みしセーター今日も着て外出

黽毘仕掛ける事を仕上げとす

出産を控えし妻に年の暮

人多きことも東京年の暮

人参の齒触り残し茹で上げし

曾根崎も大都市となり近松忌

浪花には吉本があり近松忌

帰宅せし部屋に冬至の暗さかな

平成七年～平成八年

一一七句

一月

御降を纏ひ六甲明け初むる

米国の家族も増えし御慶かな

寒鴉瓦礫の上を闊歩せり

人日を節目と仕事始まりぬ

雙六や浮世を離れゐるごとく

解体といふ丸ビルや嫁が君

青空が見え雪の山が見え初むる

熱々の御飯煮凝溶け初むる

二月

輪郭を雪に確かむ家のあり

越後路の夜深くして雪女郎

酒酌みし夜に誘はれ雪女郎

震災の街早春の色失せし

春の水水無き都市の人迎へ

震災を免れし古都梅香る

サンフランシスコに続く春の海

都心には都心の色や下萌ゆる

祭壇の聖なるものとして踏絵

絵踏せし心信仰失はず

三月

街
変り人は
変わらず
あたたか
し

復
興の兆し
ものの芽
出づること

被災者の声あたたかくなつて来し

復興の志もて卒業す

山深くなり虎杖の多くなり

耕や家庭菜園賑はひぬ

下萌を誘ひ出したる日和とも

雪少し残りて木陰なりしかな

雪靴の跡が句碑への道となり

億劫な一人暮しや春炬燵

トロイメライ洩れ来し家の花ミモザ

料亭の板場に活気水温む

治聾酒を酌みピアノリストなりしかな

一人居の垣繕ひて狭き家

四月

山門の春泥乾きつつありぬ

地下鉄の出口は花の入口に

お絵描きの初めは吾子のチューリップ

イースターエッグ目当てに子はミサへ

空に向く足の揃ひて半仙戯

休日の午後はマ―ラー長閑なり

イ―スター終へて忌心整ひぬ

初花や東京に来て十五年

春の月仰ぎ丸ビル最後の灯

春惜み丸ビル惜みつつ移転

五月

武者人形飾りて一人息子かな

サラリーマンより初夏の色始まりし

その後は知らず吉野の葉桜よ

復興の便りも増えて里若葉

海亀の波盛り上げて現はれし

夏霞透けて遠州灘白し

丸の内白く彩り更衣

子には子の好みがありて更衣

東京に住み古りもして街薄着

六月

公園の緑に吾子のかくれんぼ

夏服の色に彼女と判るまで

聖堂の網戸もれくる聖歌かな

白服の吐き出されきて丸の内

駅員も子燕に気を取られたる

被災地の噴水確と吹き上がり

薫風の甦りたる六甲に

待ち合はせ夏手袋を目印に

ジギタリス活けし端よりこぼれ初む

蜘蛛の罫を払ふ事より寺修行

山荘は閉ざされしまま時鳥

丸ビルを七十二年見し夏木

七月

食中りしてダイエツト成功す

滝音が人を集めてをりにけり

冷奴箸が崩してゆきにけり

サングラス掛けてお洒落の完了す

サングラスはづして我にかへりけり

日傘閉づことより会話生れけり

交差点日傘絵日傘行き交ひぬ

一杯の梅酒に酔ひし妻の愚痴

八月

滝壺に狙ひ定めて滝落ちぬ

胡瓜もみ今日は子供も手伝ひて

束の間の一入暮しや今朝の秋

地震の街空広くして星月夜

娘の机七夕紙の散らばれり

星飛んで星消ゆる間の静寂かな

不器用に願の糸を結ぶ吾子

手花火を終へて絵日記書き始む

九月

父祖の地を訪ひたることも秋彼岸

秋潮を割りてサーファー現はれし

ミサ曲の鎮もるところ鉦叩

秋草に心道草してをりぬ

玉川の主訪ねて生姜市

生姜市芝公園に住みし頃

六甲の霧のヘアピンカーブかな

鯊釣に餌の沙蚕を付けられず

十月

金風の沃土に句碑の生れたる

桐一葉落ちて黄土に還りけり

六甲の峰より今朝のそぞろ寒

柚子の香の立ちてより椀啜りけり

柚子の香を指に移して夕仕度

その顔は秋田小町といふ案山子

百薬の長と嘯き新酒酌む

猪垣の高く榛名湖近づける

子等は皆曾祖父知らず年尾の忌

百年は通過点なり暮の秋

十一月

霧晴れて湖面の目覚始めけり

富士よりの霧を纏ひて帰りけり

嵐山の景を整へつつ紅葉

先づやる気起すことより冬仕度

冬仕度してゐるつもり吾子の邪魔

きらきらと京が時雨れてをりにけり

京といふ色の時雨に合ひにけり

古都に来てよりの時雨となりにけり

旅よりの夜寒の帰宅とはなりぬ

凧が回転ドアー回しけり

凧やしヨパンエチュード聞こえ初む

十二月

枯芦や芦屋河畔に地震の跡

坊つちちゃんを読まぬ世代や漱石忌

枯萩の枝を押し上げ客来たる

冬日ふと隠れて暗し都心かな

湯豆腐に酒は丹波と決めてゐし

ジングルベル響き天皇誕生日

水洩をかむを憚り第九聴く

冬座敷我當の一茶佳境なる

平成九年～平成十年

一三〇句

一月

まだ仮設住宅多し風冴ゆる

巡礼の旅ヴァチカンの鐘冴ゆる

枯山も富士を彩るものとして

馬の足太く短く櫓行けり

現実に戻り都心の雪を搔く

凍蝶の魂離さざるごとし

雪の道ばかり選びて転ぶ吾子

二月

春の風邪夜の銀座に貰ひけり

ヴィオロンの音色連れ去り春立ちぬ

早春と言ふ気紛れな日差かな

家族てふ一塊の暖かさ

ホロヴェイツツ携へ二月礼者かな

サ
ン
テ
ス
テ
フ
村
の
日
差
に
耕
せ
る

フ
ル
ト
ヴ
ェ
ン
グ
ラ
ー
朧
に
透
き
通
り

永
き
日
や
ニ
ー
ベル
ン
グ
の
指
環
も
て

再演の能待つ心春立ちぬ

春の風邪弟よりも姉重く

春の風邪灰の水曜日
の家居

三月

モ
ル
ダ
ウ
の
川
幅
広
げ
春
の
水

火
加
減
を
見
極
め
も
し
て
蜆
汁

霾を
生みし
大地に
佇みぬ

新しき
靴の
馴染み
て春の
土

万物の
創世
秘めて
春の
土

風に日に梅に忌心整ひし

十五年前の三月三日ふと

蓮如忌や京都駅前ビルモダン

再会の句碑は変わらず涅槃西風

四月

花埃払ひ忽ち主婦となる

嘯は天より落花五山より

春塵を払ひ看板降ろさるる

今東男なりけり花は葉に

あと三五六日待つ桜

花 偲 び 人 を 偲 び て こ そ 吉 野

春 曉 に 消 さ れ ゆ く 尾 や 筥 星

春 の 星 二 千 四 百 年 後 又

彗星の遠退いてゆき春惜む

夢にまで朝寝してゐる我が居て

顔中が口猫の子の目覚かな

轉
に
轉
重
ね
神
の
杜

轉
の
中
の
バ
ー
ジ
ン
ロ
ー
ド
行
く

食
紅
に
服
汚
す
子
等
イ
ー
ス
タ
ー

春潮に最後のフェリー出港す

五月

若葉風千年杉に従ひぬ

未だ少し彩決めかねてゐし若葉

黒薔薇といふ名を持ちて真紅なる

更衣して不惑てふ齡迎へ

麦秋の空を繋ぎて祝ぎの地へ

丸ビルの端の新樹も伐られけり

一人つ子多くなる世や武具飾る

母の日の子等は朝より隠し事

風吹けば箒に映えて薪能

薪能大倉源次郎仄と

六月

アメリカンチエリーの色に慣れし吾子

ここよりは死線てふもの蟻地獄

日韓の絆は植田にもありて

時差の無きモーニングコール夏至の宿

韓国の少し歪みし植田かな

五月晴都心モノク口取り戻す

フランスは時差八時間明易し

点々と人深閑と緑かな

香を運び来て汗運び去りし風

黴の香を纏ひてヨハネ第二章

キーム湖の全容指呼に黴の宿

パナマ帽形見となりて子は父似

幽玄の五月闇よりシテ出づる

七月

夕風を孕みて日除巻き取られ

青山椒ソースに隠し味のシエフ

汝が為のルルドの泉とはなれり

暁を震はせ兜虫飛び

くぬぎ樹は秘密の場所や兜虫

釣果無く岩魚焼く火の消されけり

姉は赤弟は青ソーダー水

炎帝を統べたる一期一会かな

起工式待つ昂りの涼しさよ

祝福の涼しき声に和してをり

念願の涼しさ極め主の祈り

八月

千五百メートルの空夜の秋

失明を免れし眼や髪洗ふ

シャルトルの青を隔てし星月夜

卒寿てふ江戸つ子気質生身魂

揚花火果て川風の戻りけり

プロも居て旅人も居て踊の輪

縁側に足ぶらぶらと西瓜食む

子の未来それぞれにあり西瓜食む

九月

爽やかに厄年迎へたきものと

端山より泳ぎ出でたる鰯雲

一歩二歩三歩花野の人となり

娘の仕草母そのままに梨を剥く

計画はいよいよ進むか初月夜

秋扇置く仕草にも観世流

六甲のいとどに思ひ出は遠く

萩の戸を押してクリンゲ氏の来る

十月

深閑と森
絢爛と色鳥よ

億劫な手が
落花生剥きにけり

シプリアニ大司教天高きより

記念館起工の大地小鳥来る

旅多くなりたる空や後の月

黄を極め忌心極め石落の花

年尾忌や虚子記念館第一歩

新蕎麦を啜り江戸には馴染まれず

やや寒となりゐて二百三高地

船の道すなはち月の道となり

金風を追ひ風として歸路に就く

クルーズの果て西虚子忌へと急ぐ

二百三高地木の実は知つてをり

木の実落つ音にも樂の都かな

渋鮎と言はれし味に焼き上る

十一月

冬めきしこの地に記念文学館

一茶忌や信濃の大地拓けゆく

図らずも帰路の雑踏三の酉

人混みを避けて路地へと三の酉

ぽつかりと東京都心小六月

隼の一直線と言ふ自由

神杉の辞儀とも見えて神渡

隼や大観峰を指呼にして

ル
ミ
ナ
リ
工
飾
り
神
戸
の
冬
構

隼
の
形
崩
れ
し
時
獲
物

十二月

丸の内二丁目街路冬木の芽

根深にも慣れて東京生活かな

冬の空広く丸ビル跡地なる

冬風に武蔵上総の結ばれし

七盛塚見し昂りに河豚の宿

ねんねこに髪のゝと出て吾子眠る

冬帝の日輪淡く丸の内

冬帝の下記念館工事かな

餌付けされたる狸にも野性の眼

一枚の障子洩れくる第九かな

聖樹の火昼行灯となつてをり

障子開くことなく猫の入り来し

浪の花まだ海面を離れざる

稲畑廣太郎（いなはた こうたろう）
昭和 32 年 5 月 20 日、兵庫県生まれ。
6 月、ローマ・カトリックの洗礼を受ける。
洗礼名エドワルド。
昭和 57 年 3 月、甲南大学経済学部卒業。
4 月、合資会社ホトトギス社入社。本格的
に俳句を志す。
昭和 63 年 1 月、「ホトトギス」編集長に就任。
平成 11 年 5 月 30 日、社団法人日本伝統俳句協会理事
に就任。現在に至る。

※ 稲畑廣太郎句集 花神俊英叢書
初版第一刷 平成十二年一月二十日
著者 稲畑廣太郎
装釘 熊谷博人
発行所 株式会社花神社
定価 二二〇〇円（税別）